
駿河良文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【コード】

N0071W

【作者名】

駿河良文

【あらすじ】

Homage〜主従関係 読了者様への特典です。

以前、HPが生きていた頃、隠しサイトに載つけてたやつです。

本篇を読んでいない方、

本篇を読んで、本作品に、少しはいい印象をお持ちいただけただけの方、これらの方は、全力で回避してください。

(前書き)

ここにたどりついた物好きな方へ。

よくぞ、ここまで辿り着かれました。

あなたこそ、真の勇者（暇人）です。褒め言葉ですよ

さてこれは、Homage（主従関係 読了者様への特典です。

以前、HPが生きていた頃、隠しサイトに載つけてたやつです。

本篇を読んでいない方、

本篇を読んで、本作品に、少しはいい印象をお持ちいただけた方、

これらの方は、全力で回避してください。

「Homage」主従関係」読了者さまへの特典

くボツ話 ウラ話 どーでもいい話く

もう一度、確認です。

本篇を読んでいる方、

本篇を読んで、本作品に、少しはいい印象をお持ちいただけただけの方、
これらの方は、全力で回避してください。

くサルベイションナイツ・ソードスタイル・テクニクく

「構えは半身、これが原則だ」

「相手に晒す面積を最小限にするためだ」

「左足を前に、右足を後ろに。腰は落とし気味に」

「剣は下に構え、あるいは肩の高さに構える」

「この時点で剣の切っ先は相手に向けない」

「いずれも、剣に十分な速度と威力を乗せるため、ある程度の振りかぶりを必要とするからだ」

「同時に、剣の間合いを相手に悟られない為でもある」

「撃ち込みは、右足を踏み込みつつ、剣を振りかぶり、落とす」

「駆け込みは、猫背にし、腕は下に降ろし、剣は水平に」

「左右に対応できるように、この時点で腕に力は入れない」

「なるべくコンパクトに」

「往々にして“獅子の構え”と言われる」

「そして下から上へ払う際は、そのまま上体を起こし、背筋を利用する」

「あるいは、相手を一人に見定めたら剣を肩に背負う。足の動きを大股にできるため移動速度が速まる。そして剣を振りかざし、一気に剣を撃ち下ろす」

「俗に言う、“鷹の構え”ってヤツだ」

「室内、特に狭い廊下の移動においては、剣を腹に抱える様に。不意に現れた敵を一気に突く」

「一撃必殺を決める場合は、敵の懐に飛び込み、タックル」

「相手の姿勢を崩しつつ、身を翻しながら、剣を下から上に、全身の力を利用して切り上げる」

く4月30日 ラクス王太姫戴冠式当日 早朝く

ベッドの上でマグステアは目を覚ます。

「……………」

確かに、窓の外に気配を感じる。

そして、彼女は、

「……………」

ゆっくりと窓を見た。

そしてそこに、メガネをかけた、黒髪の、目の細い、極東系の男の上半身を認めた。

「……………え？」

マグステアは体を起こし、目をこする。そして、目をつぶり、目を開ける。

窓の外の男は、“うんしょ、うんしょ”と、足を上げて窓枠の下辺に掛け、そして窓枠と壁外面との間の狭いスペースに身を置こうとして、“うわっ”と足を滑らせ、男の上半身が窓から消える。

しばらくして、再び男の上半身が窓から身をもたげ、そして再度、足を掛ける。

今度はどうにか足場を確保して、男は窓に貼りついた。“ふう”とため息をつくとき、男はニコリとして、窓をノックした。

マグステアは、ゆっくりと、ベッドから降りる。

そして、ひたひたと床を歩く。

そして、震える手で、窓を開けた。

ダクは体をよじりながら、開けられる窓ガラスをよけ、そして、窓枠にしゃがみ込む。

左手で窓枠の上辺を掴んで体を支え、右手で頭を掻いて、口を開いた。

「やあ……、俺、生きてた……」

「……」

マグステアは無言だった。ただ、緑の目をパチクリとさせていた。

ダクは、咳払いし、

「……。マグステア……？」

と声を掛ける。

マグステアの唇がゆっくりと開く。

「……生きてた……、じゃ、ないでしょう……」

その震える声に、ダクはごくりと唾を飲む。

「いや……俺もびっくりのわあっ！」

瞬間、マグステアは、窓枠にしゃがむダクの襟首を掴むと、締め上げながら引き寄せた。

「今まで…何をやってたんですかっ!!」

緑の目を光らせるマグステア。

ダクは、冷や汗を垂らしながら言う。

「い……いや……。その…色々あって……、ヒナサタとの事とか……、王太子の件とか……。ヒナサタ本土に強制送還されちゃってさ。それでやっとこさ、戻ってこれたと……」

その次の瞬間。

「……!!」

ダクの襟首さらに引き寄せたマグステアは、彼の唇に吸い付き、

塞いだ。

熱く、激烈なキス。

そしてマグステアは、ダクをぐいっと引つ張る。「どわっ…！」と叫ぶ彼を窓枠から室内へと引きずり込んで投げ倒し、そして彼に馬乗りになる。

「…危うく…修道院にでも入ろうかと…思ったじゃないですか…」

マグステアはダクを見下ろしてほほ笑み、彼の胸を指でなぞりながら言う。

「でも…親父さんに止められたる？」

「そして、マグステアの指が止まる。」

「え、ええ。あ……」

「あの直後、実は、親父さんと俺、会ってるんだよ。親父さん、ドルク先生の所で養生してたから」

「ダクは肩をすくめる。マグステアは、両手をダクの胸に着いて、彼の顔を覗き込む。」

「じゃあ……、父上は……」

「うん。ゼーんぶ知ってる」

「ダクはマグステアの腰に手を当てる。」

「マグステアは、」

「……」

物言いたげに目を閉じた。…それなら、そうと、言ってくれば…父上…！

「ダクは鼻を鳴らし、」

「まあ、親父さんを責めるなって。俺、ヒナサタ送りにされて、無事に戻ってこられるかどうか分かんなかったんだから。それに、も」

つと大事なコトもあって……、その事、直接、俺の口から言いたかったし」
と言う。

マグステアは目を開ける。

「もつと大事なコト？」

ダクはマグステアを見ながら言った。

「マグステア……、ラクスの守護騎士の依頼、返事していないんですよ？」

頷くマグステア。

「ええ……。ラクス様が今日、正式に戴冠されるので……。返事の期日は今日なんです。でも……。お断りして、修道院に入ろうかと思つて……」

そして、ダクは、マグステアの腰に回る手に込める力をさらに強める。

「修道院じゃなくて……。ウチに来ませんか？」

「……」

マグステアは、恥ずかしそうに顔を赤らめ、唇を結ぶと、静かにダクの胸に顔をうずめる。

と、ダクが続けた。

「実は親父さんにも話して……。既に了解を得ている」

「え？」

マグステアはびっくりして顔を上げる。

ダクはにやにやしながら言った。

「いや、君の親父さんも、姉ちゃんとできてたらしくて……。子どもできて……」

「はあ!？」

マグステアは一瞬、訳が分からなかった。ダクは思い出すようにクッククツクツと笑う。

「それであの親父さんが、バス叔父さんに頭下げた。ありゃ傑作だったね」

「……」

ダクはメガネを直した。

「んで、その親父さんに、今度は、俺が頭を下げたってわけ」

そして、にこりとして続ける。

「後は、君の返事待ち。マグステア……」

「ダク……」

マグステアは目を細める。

「ほんと…器用な人……」

「根回しは、ヒナサタ人の特技ですから」

ダクは笑う。

そして彼は、黒く深い瞳で、マグステアを見つめた。

「宿命を変える気はない？ 俺との運命を歩んでくれませんか？」

マグステアは、くすつと笑う。

ダクは、“あつ” と思い出したように、

「ああ、お前好みに言い直すと…、」

そして眼鏡を直してほほ笑む。

「結婚しよう、マグステア」

マグステアはくすつと笑う。

「ダク……。わっ！」

そして、何かを言い出す前に、ダクは、マグステアの頭に手を添え、そして、強引に唇を塞ぐ。

ダクは、唇を奪いながら、

「…嫌とは言わさん…」

と呟く。そして、上下逆になる。ダクはマグステアを組伏せた。

「う…ん」

マグステアは、唸った。

朝日が差し込む部屋の床。そこに重なる二人の影。そこにヒソヒソ声が響く。

「……ねえ、この首から下がっている袋、なに？ ヒナサタの風習？」

「ん？ ああ、“お守り”ってんだ。中には…、お前の髪の毛が入っている」

「え？」

「“処女の髪の毛には魔除けの力がある”って、お前がくれたヤツ」

「ああ」

「ところで、ニコラスの親父さんから聞いたんだけど…、お前の髪の毛って、色んな所で活用されてたんだね」

「何のこと？」

「ほら、例の…、あんにやるの兜の飾り」

「？」

「お前、髪の毛、アンドリユーの奥さんに切ってもらってたんだろ」
「うん」

「どうやら、その髪の毛、アンドリユー経由でニコラスの手に渡り、そんであの兜の装飾に使われたんだってよ」

「……。父上は…、…信心深い人なんで」

「確かにあの鎧兜は、最後まであんにやるを守り続けた。でもアイツ、自分からそれを捨てた」

「そして…、私の髪を…持ち続けたあなたは…」

「ああ……。おかげで本当に…“幸運”に会えた。そして導かれた」

「……。そして今、ここにこうして……、私の元に戻って来てくれた
た……」

「そしてもう、俺は何処にも行かない。お前は本当に、俺の救い人（セイヴィア）だ」

「当然でしょ。だって、私、あなたの“妻”だもん！」

朝の光が差し込む開けられた窓。そこにヒソヒソ声が響く。

「ところで…ダク…」

「うん？」

「私に“赤ちゃん産ませる”って言ってたけど…、もっと頑張ってくれなきゃ…」

「うん。俺、頑張る」

「それでね…、」

「ん？」

「マグステアの花が…露をたたえてるの…」

「きゃっほおう」

〈恋はタイミング〉

「母さん、アカデミー時代は、子供っばいちょっかいを出してきた男どもをまとめてボコツてたらしいから」

「ホント、そのぐらいの男の子って、愛情表現がバカだしね」

「……まあ、ね。それで男がよりつかなくなった、ってわけ、だろ
うな」

「王宮で守護騎士やってたころは？」

「当時、上司だった人、一筋だったらしいよ」

「ああ、死なせちゃったって人？」

「そ」

「その後は？」

「いいところの、結構なイケメンに惚れられてたみたいだけど、その人は奥手でね、なかなか母さんに告白出来なかった」

「なんで知ってんの？」

「いや、後になってプロポーズしてきたもん、父さんの目の前で、
母さんに」

「……、なんかその人、かわいそう。他には」

「あとは詳しく知らないけど、コニール家の人たちの話によると、
実はケントウリア騎士団の若手騎士たちから、結構アタックをかけ
られていたらしいよ」

「そうなの？ やるじゃん、母さん。で？」

「当時、母さん、好きな人を死なせたことでそのショックから立ち
直っていなかったばいから。ほとんどは、母さんが気づかない間に
ふっっていたらしい」

「うーん……。他は？」

「それが一番アレだ。ニコラスの爺さんとか当時騎士団の副長とか
に、母さんに気があることがバレて、半殺しにされたらしい。今に
なって思うと、父さんも、羽鳥伯母さんの件がなければお爺ちゃん
に殺されてたかもしれない」

「……。思うに、父さんが母さんをゲット出来たのって、ホント、
奇跡だよな」

「タイミングと言いなさい。そんなわけだから、ケイコ、早まるん
じゃない。どこの馬の骨ともわからん男をつれてこようものなら、

父さん、キレちゃござ
「はいはい」

（昼下がりの新妻）女たちのしょうもない話）

とあるカフェに、黒髪に、薄い色の入ったレンズの眼鏡を掛けた女が入ってきた。

女は凜々しかった。

しばらくして、赤銅色の髪に、褐色の肌の女が、そのカフェに入ってきた。

女は気品に溢れていた。

そのカフェのガラス窓に声が響く。

「ロゼ、こちらです」

「あら、びっくり！」

「ロゼは、変わらないですね」

「お久しぶり。セイ…、じゃなかった、ジュリア。どうしたの？

その黒髪？」

「いや、聞いてくださいよ、もう。タカシ…、あ、ダクの新しい名前ですけどね」

「聞いている。例の“喪服のセイヴィア”の新聞記事。あれを見て、

真つ先にバズさんをとつちめに行つて、ぜくんぶ吐かせたから。：
あ、私も、抹茶&豆乳」

「バズ叔父様が、震え上がっていましたよ。“この会見をセツティングしなかつたら、グラナハイムの財力をもってシキシマ海運を潰す”って脅いたらしいじゃないですか」

「はは。ダ…、じゃなかつた、タカシは？ “ヒナサタの政治工作グループの理事と兼職している”って聞いてるけど」

「ええ。詳しくは申せませんが、何やら“白のなんとら”とかいうヒナサタの組織と、オルタの家業との調整役を担っているようです」
「へえ。元気にしているんだ」

「もう、元気よすぎます。あ、そうそう、それで聞いてください、ロゼ。この髪のことなんですけどね」

「染めたの？」

「いえ。カツラです。街に出る時はこの格好で、金髪と碧眼を隠しているんですけど」

「うん。一瞬、貴方だつて、判んかつた。それで？」

「それが、この姿になった途端、アイツつたら、見境いなく襲ってくるんですよ」

「……………」

「もう…………。この前なんか、買い物に行つて帰ってきて、家…それも、もともと物置きで、増築中の建物なんですけど…………、その台所で、いきなり襲つてきたんですよ。つたく」

「……………」

「あのアホ、コテツコテのヒナサタ人なもんだから…………。金髪碧眼の時はまだしも、私の恰好がヒナサタ人に近くなつた途端、もう、それは、餓えた狼のように、見境いなくなるんです…　もう、大

変なんです…」

「新妻…してるのね……………」

「はい ……つて。で、そちらこそ、どうされたんですか？」

「あ、ああ。ねえ、ジュリア。ジュリアのことを知っているのは、

どこまで？」

「え？ 一応、父上と叔父上だけですけど。それとオルタ家の関係者。それ以外の王朝関係者は…、ラクス王女も含めて知らないはずですが」

「ふむ。ところで、なんで“喪服のセイヴィア”なの？」

「こつちが知りたいですよ。私自身はヒナサタ人と結婚したとはいえ、アストラスに住まうアストラスの騎士ですから。祖国の危急とあらば、真っ先に剣をとって戦います。それだけですよ」

「オルタの人はなんて？」

「幸い、オルタ家にいると、王軍より効率的に動ける。彼らも、ある程度は協力してくれますし」

「ある程度？」

「あ、“ある程度”というのは、彼らは一応、ヒナサタの人間なんので、アストラスへの内政干渉になりますから…」

「また……。その辺、あの国の民って、変に律儀よね」

「ええ。まあ、でも、それと、あと一人、風車小屋のドルクのところの娘さん、彼女はヒナサタ人ではないので、存分に協力してくれます」

「え…？ ドルク博士って、娘、いたんだ？」

「あ……、まあ…、秘密ですよ。本当は養子です。色々あって……。元は敵対していた女なのですが…」

「敵対？ …まさか、同時多発クーデターの関係者？」

「…そんな…ところですよ…けど、なんとかオルタ家が見つければ、二度と敵対行為に加担しないよう、それなら味方に引き入れてしまおうと、説得してオルタに連行したんです」

「ふ…ん」

「それで、彼女の身元を調べてみたところ、どうもドルクと出身地が同じ、ということが判明しまして。なんだかねで、ドルクが引き取ることに…」

「なるほど…ね…」

「それでその女、武人としてなかなかの手練でして…。たまに、秘密の荒仕事をドルクにも内緒で請け負って貰ってます」

「そうなんだ。“一人で活動している割には、効率的に動いているな”と思ってたけど、ちゃんとしたサポート体制があるのね。んで、それでなんでまた“喪服”？」

「あ、そうそう、それで私、鎧がボロボロになって、家に置いてきちゃったんですけどね、新しい鎧をタカシがくれたんです。ヒナサタの鎧で、“クロカワオドシ”ってスタイルらしいんですけど。それに例のグリフォンの黒旗から作ったサーコートを着ていたら、なんか“喪服”って世間的には受け止められたらしくて……」

「そういうこと…だったのねえ。でも、なんか美談になっているわよ」

「ええ、びつくりしました。“騎士の時代を弔うため”とか。ケントウリアに銃を持たせたのは、他ならぬこの私なんですけどね」

「そう。あれから、また配備数が増えて。私んとこ、新しい会社を立ち上げたの」

「“グラナハイムアーモリー”？」

「そう。だけどさ、それで、良からぬ名前が増えちゃって……」

「うふふ。“高貴な薔薇”から、“吸血薔薇”ですね」

「まったく……。 “ヤレヤレ”よ。ま、否定はできないけどね。その件もあって、貴方に会いたかったの」

「と、いいいますと？」

「“吸血薔薇”って呼ばれるのはいいんだけど……、せめて、もつと、社会に役立つこともしておきたいのよ、私としては」

「はあ」

「それで、慈善団体を作ろうと思っているの。その名も、“救世騎士団”」

「はい？」

「いいアイデアでしょう。で、貴方が創設メンバーの一人なら、会員の勧誘がしやすいし、説得力もある」

「はあ……」

「それに、会員は原則非公開。秘密クラブみたいなもんにするから、貴方には迷惑をかけないわ」

「まあ……」

「貴方にもメリットがある筈よ。オルタ家だけじゃ、何かと活動が不便でしょ。でも、ちゃんとした支持母体があれば資金と情報収集も容易になる」

「まあ。それなら別にいいですけど……」

「じゃ、決まりね。というわけで、あなたが創設者ってことにして、私が会員1号。レオを2号にさせて、ルゴルドフ夫妻が3号と4号。このそうそうたるメンバーがあれば、世界的ネットワークを秘密裏に作れる」

「なるほど……。私の方からも旦那に話しておきます。ヒナサタもこの話は、メリットが大きいでしょうから」

「ぶっ」

「はい？」

「いや、まさか貴方の口から、“旦那”という言葉が出るなんてね

……」

「そういう口ゼこそ、どうなんですか？ レオポンとは？」

「難しいところよ。あっちは国王、こっちはグラナハイム一門総帥だから。あ、ありがとう。やっぱり、抹茶&豆乳ね」

「ですね」

「そんなことより、もっと聞かせてよ」

「何を？」

「新妻の新婚生活」

「……」

「なにポツとなってるのよ。顔、真っ赤じゃない」

「……」

「客は私達だけだし、店員も女だけ、だし。いいじゃない、白状なれよ」

「……。それが、もう、大変なんですよ。あの家、変な人が多いから」

「はい？」

「いえ。義理の姉になる予定の人がいて……。その人が、どうも捕縛術のマスターらしくて……」

「……」

「……」

「……。一応、聞いてあげる。何があったの？」

「……。いや……。捕縛術も武人として、必要な素養かな……と思っ
て……」

「……」

「教えにもらいにいったら……。タカシには警告されていたんですけど……。その人、縄を持つと、性格が変わるらしくて……。それで、実演現場を旦那に見られて……」

「……」

「……」

「それで……？」

「そのロープマスターは、すぐに逃げて、身動きのとれない私と、
タカシでしょ」

「……」

「それで、運悪く、私、その時、お使い帰りで……。黒髪のカツラ
だったんです」

「……」

「あのアホ、それは狂ったケダモノのように……。その後しばらく、
口きいてあげませんでした」

「……」

「まあ、確かに……。私も、タカシのあばらをへし折りそうになる
ことがあって、それで、あのエロちびザル、“身動きとれない今が
チャンスと思った”とか、訳の分からないことを土下座して言うも
んだから……。確かにスゴかったので、許してあげましたけど……」

「

「…貴方達って、普段…、どういうプレイしているの？」

「な！ ふ、普段は、しごくまともな夫婦生活ですう…！」

「前から思ってたんだけどさ…、貴方って、“どM”の気があるんじゃない？」

「……………。って！ い、いったい何を！ そ、そういう口ゼこそ

…」

「私は自他共に認める“S”です」

「じゃなくて、人のことはさておき、まだバージンなんじゃないんですかあ〜？」

「な、なによっ！ 勝ち誇っちゃって！」

「ふっふっふっ」

「ところで、ジユリア？ ちょっと訊きたいことが…」

「はい？」

「スケルト人って、治癒能力が高いでしょ」

「まあ」

「スケルト人のヒーメンって再生するの？」

「いえ。タカシが面白半分調べましたけどね。結局、それって、膣口周囲の粘膜のヒダですから。それが膣口を狭めている（その狭め具合、そして処女膜の強度、弾性は人それぞれ。従って、処女膜の有無は、処女であることの証明にはならない）だけです。性交のとき、50%の女性が裂けて出血する（すなわち女性全てが破瓜の血を流すわけではない）らしいですけど。それで、タカシが言うには、裂けるものだから、裂けた後の治癒過程で、裂けた部分が合わさるような処置をしておかないと、裂傷面が重なるように治るすなわち再生するはずがない、と」

「ふ〜ん。ねえ、痛かった？」

「痛かったですよ、ほんとに。“なんで、こんな痛いのに、男どもは要求するんだろ”と思いました。でも、“しょうがないな”って何回かやらせているうちに…、もう」

「

「中に出される時って、出されたって感覚ある？」

「ないですけど……いや、でも“あ、今から出すな”ってのは、そして、“あ、出しているな”ってのは、わかりますよ　中でそういう動きをするから」

「ふうん……。で、西大陸人はデカいけどフニヤってて、ヒナサタ人のって、ものすごく硬くて、貫通力があるっていうのは、ホント？」

「いや、他のを知らないの……。でも、コニールの継母が言うには、それは迷信だそうです（と、外国人と付き合ったことのある娘が言っていた）よ。でも、ただ硬いから、デカいから気持ちいいという訳ではないらしいです」

「ほお……。ねえ、潮は？」

「……。というか、私たち……。何を話しているのでしょうか？　昼間っから」

「……。女だけの猥談って……。エゲツないわよね」

「私たちって、すっかり“昼下がりのマダム”ですね……」

「何言ってるの？」

「……」

裸の女は、ベッドの上で、その膝を枕にしている裸の男の頭を撫でた。

彼女は優しく、彼の髪と彼の耳を弄びながら、子守唄のような歌を口ずさむ。

彼は、頭をよじり、彼女の乳房の谷間越しの、彼女の唇を見上げる。

「その歌なんだけどさ……」

「？」

「その乙女……、死ななかつたと思うんだよね」

「え？」

「たぶん、その賢者と幸せに暮らしたと思うよ」

「どうして？」

4月のデントの大地に丘に

と、男は、女の金色のヘアの茂る部位に顔を押し付ける。

マグステアの花が咲くでしょう

女は、軽い悲鳴を上げつつも、笑いながら、彼の頭に手を当てる。

マグステアの花が咲く頃に、私はあなたに出会うでしょう

黒い髪の男は女を押し倒し、そして自らの腰を女の恥丘に押し当て、つながる。

雪解けを迎えたその丘は、再び白一色に染まるでしょう

女は、その緑の目を細めて喘ぐ。振り乱された金髪から、優しい香りが立ち昇る。

マグステアの香りが満ち渡り、あなたをやさしく包むでしょう

そして、男は、呻いて体を震わせる。

賢者は涙を流し、その涙は露となり
女もまた、呻いて体を震わせた。

花を露で満たすのです

露をたたえたその花の

男は囁く。「いっぱい、出しちゃった」

香りと滴が、風に乗り、白の花弁が、空に舞い

春の大地を潤しながら、やがて花は散るでしょう

女も囁く。「また…穢されちゃった…」

でも悲しまないで

丘に舞う白い花びらが、あなたの心を癒すでしょう

「安全な日？」男は自身が白く汚した所を見ると、女のお腹に口
づけをする。何かを願うように。

「危険な日」女は目を閉じ、口づけされたお腹を撫でる。祝福
を受け止めるかのように。

命の芽吹くデントの丘で、まことの愛を歌うでしょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0071w/>

2011年9月23日03時24分発行